

ヒエロニムスの翻訳論の日本語訳「エウセビオス『年代記』の訳者序文」と「オリゲネス『エゼキエル書説教』の訳者序文」

加藤, 哲平
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7410594>

出版情報：英語英文学論叢．76，pp. 39-51，2026-03-18．九州大学大学院言語文化研究院英語科
バージョン：
権利関係：



ヒエロニュムスの翻訳論の日本語訳

「エウセビオス『年代記』の訳者序文」と
「オリゲネス『エゼキエル書説教』の訳者序文」

加藤 哲 平¹

ヒエロニュムスは私たちの最も内奥の、思慮に富んだ人生における伴侶であり、生の導き手の一人となり得るだろう。……その浩瀚かつ多種多様な著作は私たちにとっては、私たちがいつも立ち戻り、飽くことなく訪ね、知ろうとするヨーロッパの偉大な古代都市のひとつが空間として存在するかのごとく、時間の上で存在しているものだと言えよう。まさしくそれは「ヒエロニュムス市（ポリス）」、ヒエロニュムス町なのだ。……かつては（短い年月の間ではあったが）騒々しかったが、今日では死んだようになったヒエロニュムス市の界限を後にし、都心からひたすら遠ざかって、「帰化した外国人」街、あるいは「居留外国人（メテック）」街と呼び得る区域、広大なヒエロニュムスの外国人受け入れ施設（クセノドキウム）、すなわち彼の翻訳作品の中に入っていく。ここにはカイサレイアのエウセビオスの『年代記』、オリゲネスの数篇の説教、盲目のディデュモスの論説、パコミウスの戒律の翻訳などがある。

——ヴァレリー・ラルボー²

緒論

本稿は、ギリシア語で書かれたエウセビオス『年代記』とオリゲネス『エゼキエル書説教』をラテン語訳したヒエロニュムスが、それぞれの著

-
- 1 江口巧先生、志水俊広先生、そして故田中俊也先生の、九州大学大学院言語文化研究院における長年のご尽力に感謝する。とりわけ、筆者の研究に興味を持ち、折に触れて感想や質問を下された田中先生のご冥福をお祈りしたい。
 - 2 『聖ヒエロニュムスの加護のもとに』（西村靖敬訳）幻戯書房、2023年、16頁および46頁。

作に付したラテン語の訳者序文を日本語訳したものである（筆者の知る限り、いずれも本邦初訳である）。

古代末期の西方キリスト教会における教父ヒエロニムスは、修道者、教義学者、聖書学者など、さまざまな側面を持つ多面的な人物だったが、とりわけ今日のラテン語聖書の基礎を作った翻訳者としての側面がよく知られている³。彼がヘブライ語原典からラテン語に翻訳した旧約聖書の全文書と、彼が既存のラテン語訳を改訂した福音書は、後にカトリック教会の正典としてまとめられ、ウルガータ聖書と呼ばれることになった。ただし、ヒエロニムスは、そうした質量共に他の追随を許さない翻訳上の偉業を成し遂げた実践家だった一方で、その実践に基づいて翻訳の方法論を論じた理論家でもあった。その方法論は、彼に大きな影響を与えたキケローのそれと共に、現代の翻訳学における理論の出发点と見なされている⁴。

ヒエロニムスの翻訳論としては、著者自ら『翻訳の最善の方法について』と題した『書簡57』の、とりわけ次の一節がたびたび取り上げられてきた⁵。

私自身、ギリシア語からの翻訳においては——聖書の場合を除いて、そこでは語順さえも神秘である——言葉から言葉ではなく意味から意味を訳すことを認めるばかりか、公言している。

Ego enim non solum fateor, sed libera voce profiteor me in interpretatione Graecorum absque scripturis sanctis, ubi et verborum ordo mysterium est, non verbum e verbo, sed sensum exprimere de sensu ...

ここから、多くの研究者たちは、ヒエロニムスは基本的には意識（「意味から意味を訳す」）を旨としつつも、聖書だけは「語順さえも神秘である」がゆえに、例外的に逐語訳した（「言葉から言葉を訳す」）のだと考

3 ヒエロニムスの生涯や思想については、加藤哲平『ヒエロニムスの聖書翻訳』教文館、2018年を参照せよ。

4 Georges Cuendet, “Cicéron et Saint Jérôme traducteurs,” *Revue des études latines* 11 (1933): 380-400; Susan Bassnett, *Translation Studies* (3rd ed.; London: Routledge, 2002), 48-53.

5 ヒエロニムス『書簡57』5.2 (CSEL 54, ed. Isidor Hilberg, 1910, 508)。

えてきた⁶。しかしながら、こうした単純な見方は、近年ではさまざまな観点から批判されている。たとえば、Adam Kamesar は『書簡57』の伝統的な解釈を批判して、この箇所は実際にはヒエロニムス自身の翻訳論を説明しているのではなく、古代の聖書翻訳における逐語訳の伝統について説明しているのだと解釈した⁷。また Sebastian Weigert や Matthew Kraus は、『書簡57』で明らかにされたヒエロニムスの聖書翻訳論が実践に適用されているのかどうかを検証するために、ヒエロニムスの訳文を原典と比較し、彼が聖書を必ずしも逐語訳していたわけではないことを示した⁸。さらに Michael Graves は、ヒエロニムスの聖書翻訳論の論拠として『書簡57』ばかりが取り上げられることを批判して、同書ではなく『書簡106』こそが、聖書翻訳に関する彼のバランスの取れた考えの情報源になると主張した⁹。

上のような研究史の流れを受けつつ、筆者としては、ヒエロニムスの翻訳論は聖書の翻訳だけではなく、ギリシア教父文学のそれをも射程に入れたときに、初めて十全に理解されるはずと考える。言い換えると、ヒエロニムスの翻訳論を明らかにするためには、『書簡57』の聖書翻訳論を再解釈するだけでは不十分であり、またそれを実践の観点から実証するだけでも不十分であり、さらにはたとえ『書簡57』に加えて他の著作をも考慮に入れたとしても、それらが聖書翻訳に関する記述である限り、やはり不十分なのである。

6 Cuendet, “Cicéron et Saint Jérôme,” 383; J.N.D. Kelly, *Jerome: His Life, Writings, and Controversies* (London: Duckworth, 1975), 203; Daniel Weissbort and Astradur Eysteinnsson (eds.), *Translation – Theory and Practice: A Historical Reader* (Oxford: Oxford University Press, 2006), 28-9.

7 “Jerome,” in *The New Cambridge History of the Bible* 1, ed. James C. Paget and Joachim Schaper (Cambridge: Cambridge University Press, 2013), 653-75, esp. 669.

8 Weigert, *Hebraica Veritas: Übersetzungsprinzipien und Quellen der Deuteroniumübersetzung des Hieronymus* (Beiträge zur Wissenschaft vom Alten und Neuen Testament 207; Stuttgart: Kohlhammer, 2016); Kraus, *Jewish, Christian, and Classical Exegetical Traditions in Jerome’s Translation of the Book of Exodus: Translation Technique and the Vulgate* (VCS 141; Leiden: Brill), 2017.

9 *Jerome, Epistle 106 (On the Psalms): Introduction, Translation, and Commentary* (Writings from the Greco-Roman World 47; Atlanta: SBL Press, 2022); “Jerome’s Principles of Biblical Translation in the Context of Classical and Sacred Ideals,” *Ephemerides Theologicae Lovanienses* 100.1 (2024): 43-72.

次の表1は、Alfons Furstがヒエロニュムの訳業全体をまとめたものである¹⁰。

(表1) ヒエロニュムによる翻訳作品リスト

年	翻訳作品	名宛人
380	エウセビオス『年代記』	ウィンケンティウスとガリエヌス
380/81	オリゲネス『エレミヤ書説教』14篇	ウィンケンティウス
	オリゲネス『エゼキエル書説教』14篇	ウィンケンティウス
	オリゲネス『イザヤ書説教』9篇	—
383/84	第一期聖書編集（古ラテン語訳の改訂） 福音書 ローマ詩篇（散逸）	ダマス —
	オリゲネス『雅歌説教』2篇	ダマス
384/87	ディデュモス『聖霊について』	パウリニアヌス
386/91	第二期聖書編集（七十人訳に基づく改訂） 歴代誌（散逸） ヨブ記 ガリア詩篇 箴言（散逸）・コヘレト（散逸）・雅歌	ドムニオとロガティアヌス パウラとエウストキウム パウラとエウストキウム パウラとエウストキウム
387/92	『ヘブライ人福音書』	—
389/91	『ヘブライ語の名前について』	ルプルスとウェアリアヌス
389/91	『ヘブライ語の地名について』	—
392	オリゲネス『ルカ福音書説教』39篇	パウラとエウストキウム
390-396/ 398-406/7	第三期聖書編集（ヘブライ語からの翻訳） サムエル記・列王記 イザヤ書 エレミヤ書 エゼキエル書 ダニエル書 十二小預言書 ヨブ記 エズラ記・ネヘミヤ記 歴代誌 ソロモンの書（箴言、コヘレト、雅歌） 詩篇（ヘブライ語）	パウラとエウストキウム パウラとエウストキウム — — パウラとエウストキウム パウラとエウストキウム — ドムニオとロガティアヌス クロマティウス クロマティウスとヘリオドルス ソフロニウス

10 *Hieronymus: Askese und Wissenschaft in der Spätantike* (2nd ed.; Freiburg: Herder, 2016), 90-91.

年	翻訳作品	名宛人
	五書 エステル記 ヨシュア記・士師記・ルツ記 トビト記 ユディト記	デシデリウス パウラとエウストキウム エウストキウムとパンマキウス クロマティウスとヘリオドルス —
393/98	エピファニオスの2書簡(『書簡51』と『書簡91』)	—
398/99	オリゲネス『諸原理について』(『書簡124』)	パンマキウスとオケアヌス
398-404	テオフィロスの9書簡(『書簡87』『書簡89』『書簡92』 『書簡96』『書簡98』『書簡100』『書簡113』) 同『ヨアンネス・クリュソストモス駁論』(散逸)	
400	リダのディオニュシオス『テオフィロス宛書簡』(書簡94)	
402?	テオフィロス?『イザヤ幻視について』	
404	パコミオス修道規則と11書簡 タベンニシのテオドロス書簡 ホルシエシ『修道士指導の教え』	レオンティウスとシルヴァヌス

ここからも明らかなように、ヒエロニムスは作家としてのキャリアの最初期から晩年に至るまで、聖書のみならずさまざまなギリシア教父文学のテキストをラテン語に翻訳している。それゆえに、彼の翻訳論もまたその訳業全体に照らして検証されるべきなのである。

では、『書簡57』(や『書簡106』)以外にどのようなテキストを読めば、ヒエロニムスの翻訳論を明らかにすることができるだろうか。上の表1に挙げられているのは彼が翻訳を実践した翻訳作品であり、そのうちのいくつかには彼が自身の翻訳論を説明した序文が付されているものもあるが、すべてではない。しかし幸運にも、ヒエロニムスとその論敵ルフィヌスによるギリシア教父文学の翻訳を扱った論文の中で、Friedhelm Winkelmann は、ヒエロニムスが自らの翻訳論について論じている箇所を、次の表2のように時系列に並べている(表中に見られる明らかな誤りは修正した)¹¹。

11 “Einige Bemerkungen zu den Aussagen des Rufinus von Aquileia und des Hieronymus über ihre Übersetzungstheorie und -methode,” in *Kyriakon: Festschrift Johannes Quasten*, ed. Patrick Granfield and Josef A. Jungmann (2 vols; Münster: Aschendorff, 1970), 2:532-47.

(表2) ヒエロニムスが翻訳論に言及している著作リスト

年	著作
380	エウセビオス『年代記』の訳者序文
380/81	オリゲネス『エゼキエル書説教』の訳者序文
383/84	オリゲネス『雅歌説教』の訳者序文 ¹²
386/87	ディデュモス『聖霊について』の訳者序文 ¹³
387/89	『エフェソ書注解』2.4.16 (『ルフィヌス駁論』1.27でも引用)
389/92	オリゲネス『ルカ福音書説教』の訳者序文 『ヘブライ語の名前について』の訳者序文 (ウルガータ) サムエル記・列王記序文 ¹⁴
393	『書簡48』 4
393/401	『書簡106』
394	『書簡61』 2
395	『書簡57 (翻訳の最善の方法について)』 ¹⁵
396	『書簡82』 7
398	(ウルガータ) ソロモンの書序文 ¹⁶
399	『書簡84』 7.12
402	『書簡97』 3
404	『書簡112』 19.20 パコミオス修道規則
404/5	(ウルガータ) ユディト記序文 ¹⁷ (ウルガータ) エステル記序文 ¹⁸ (ウルガータ) トビト記序文 ¹⁹
406	『書簡114』 3
407	『書簡121』 2.10

- 12 オリゲネス (小高毅訳) 『雅歌注解・講話』(キリスト教古典叢書10) 創文社、1982年、235頁。
- 13 アタナシオス、ディデュモス (小高毅訳) 『聖霊論』(キリスト教古典叢書15) 創文社、1992年。ただし、ヒエロニムスの訳者序文は収録されていない。
- 14 加藤『ヒエロニムスの聖書翻訳』、271-75頁。
- 15 高畑時子「〈翻訳〉ヒエロニムス著「翻訳の最高種について」(書簡57)「パンマキウス宛の手紙」」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要・外国語編』6巻1号、2015年、153-71頁。
- 16 加藤『ヒエロニムスの聖書翻訳』、302-3頁。
- 17 加藤『ヒエロニムスの聖書翻訳』、315頁。
- 18 加藤『ヒエロニムスの聖書翻訳』、308-9頁。
- 19 加藤『ヒエロニムスの聖書翻訳』、313-14頁。

以上の著作以外にも参考になるテキストがあるかもしれないが、ひとまずこの表2に挙げられているテキストをすべて精読することが、ヒエロニウムの翻訳論を明らかにする近道といっていいただろう。そこで本稿では、「エウセビオス『年代記』の訳者序文」と「オリゲネス『エゼキエル書説教』の訳者序文」の全文を訳出する。

エウセビオス『年代記』の訳者序文

解説

序文の名宛人は、ヒエロニウムの友人であるウィンケンティウスとガリエヌスである²⁰。ヒエロニウムは、東方世界を遍歴していた380年頃、コンスタンティノポリスでエウセビオス『年代記』のラテン語訳を完成させた。同書は創世記のアブラハム以来の出来事が年代順に編纂された世界史要覧である²¹。序文の中でヒエロニウムは、まずローマにおけるギリシア文学翻訳の先行者であるキケローに依拠しながら、翻訳の困難さを説明する。次に彼は、七十人訳、アクィラ、シュンマコス、テオドティオンなど聖書翻訳の先行者たちの訳業を、「風味」、すなわち彼らのスタイルに基づいて評価する。そしてヘブライ語原典にはもともとあった、韻律をはじめとする文体の妙が、ギリシア語やラテン語に翻訳すると不可避免的に失われてしまうと指摘する。このような説明は、実はヒエロニウム自身の翻訳にも見られるかもしれない同様のスタイル上の欠点を正当化するためのものであった。彼は翻訳一般の困難さのみならず、エウセビオス『年代記』に特有の訳しにくさについても論じる。その後、ヒエロニウムは自分の翻訳を非難する者たちを牽制しつつ、ラテン語版『年代記』の特徴を説明する。それによると、同書は単なる

20 翻訳の底本は、GCS 47 (= Eusebius Werke 7), ed. Rudolf Helm, 1984, 1-7. 英訳は、Stenfan Rebenich, *Jerome* (The Early Church Fathers; London: Routledge, 2002), 75-78. 独訳は、Fürst, *Hieronymus*, 317-23. ヒエロニウムの交友関係については、Fürst, *Hieronymus*, 157-252の“Prosopographia Hieronymiana”が詳しい。ウィンケンティウスはp. 251、ガリエヌスはp. 198に登場する。

21 エウセビオス『年代記』については、Richard W. Burgess, “Jerome Explained: An Introduction to his *Chronicle* and a Guide to Its Use,” *Ancient History Bulletin* 16.1-2 (2002): 1-32; Anthony Grafton and Megan Williams, *Christianity and the Transformation of the Book: Origen, Eusebius, and the Library of Caesarea* (Cambridge, MT: Harvard University Press, 2006), 133-77, 329-37.

ギリシア語からの翻訳ではなく、エウセビオスが簡単にしか触れていないローマ史をヒエロニムスが独自に補完したものだという。

翻訳

エウセビウス・ヒエロニムスが、ウィンケンティウスとガリエヌスに挨拶を送ります。これは学識ある者たちの古い習慣なのですが、そうした者たちは文才の修練のために、ギリシア語の書物をラテン語で物語ったり、また——それ自体において困難であることとして——韻律の束縛が加えられているときも、名高い者たちの詩を翻訳したりしました。それゆえに、我々のトゥッリウス〔・キケロー〕もまたプラトンのすべての書物を言葉どおりに翻訳し、また今やローマ人〔と言っても過言ではない〕アトスを六歩格にして出版すると、クセノフォンの『家政論』で楽しんだのです。この作品〔ラテン語訳の『家政論』〕の中で、雄弁という黄金の流れは、多くの場合、ある粗野で濁った障害によって澱んでしまっているため、それが翻訳されたものだと知らない者たちは、それがキケローによって述べられたものだとは信じないほどでした。というのも、他人の行に沿いながら、どこへも足を踏み外さないことは難しいですし、また他の言語で上手に述べられていることが、翻訳においても同じ優雅さを保持することは困難だからです。個々の語の特質によって、何らかのことが示されるわけですが、私は何かを表現するような自分自身の語を持っているわけではありません。すると、私が意味を満たそうとする限り、長い回り道の拳句、辛うじて短い距離を進めるだけなのです。転置法の回りくどさ、格の相違、成句の多様さ、そして最後に、自分自身の、いわば土着の言語様式が加わります。もし私が言葉通りに翻訳するなら、それは耳障りに響くでしょう。一方で、もし語順や言い回しに関して、必要に迫られて何かを変えようものなら、私は翻訳者の職務から逸脱したように見えるでしょう。

それゆえに、私の親愛なるウィンケンティウスよ、そしてあなた、我が魂の一部たるガリエヌスよ、お願いします、この急ごしらえの仕事にあるものは何であれ、裁判官の心ではなく、友人の心をもって読んでください。なぜならとりわけ、ご存じのように、私は写生字に対してもとても急いで口述したからであり、また聖なる巻物の証言が仕事の困難さを証言しているからです。それ〔聖書の証言〕は七十人の翻訳者たちに

よって出版されましたが、ギリシア語では同じ風味を保存できませんでした。このことに触発されて、アクィラ、シュンマコス、そしてテオドティオンは、同じ作品のためにほとんど別の作品を急いで翻訳したのです。ある者〔アクィラ〕は、優雅に言葉から言葉を訳そうとし、他の者〔シュンマコス〕は、むしろ意味に従おうとし、第三の者〔テオドティオン〕は、古い者たち〔七十人訳〕から大きくかけ離れないようにしました。一方で、第五版、第六版、そして第七版は、いったいどんな作者に帰されるべきかが知られていないにしても、彼らは名前がなくても權威を獲得できるほどに分かりやすい相違を保持しています。それゆえに、まさしく次のようなことになるのです。すなわち、聖書は洗練されておらず響き合っていないように見えますが、それは教養ある人々が、それらがヘブライ語から訳されたことを知らないまま、その真髄ではなく表面を検証する限り、あたかも内容という美しい体を内側に見出す前に、文体という汚れた衣装に驚いてしまうということなのです。つまるところ、詩篇よりも旋律的なものは何でしょうか。詩篇は、私たちの〔ホラティウス・〕フラックスやギリシア人ピンダロスのやり方で、あるときはイアンボス〔短長格〕で流れたり、あるときはアルカイオスの韻律で響いたり、あるときはサップフォーの韻律で誇張されたり、またあるときは半分の詩脚で進んだりしているのです。申命記やイザヤ書の歌よりも美しいものは何でしょうか、ソロモンの書物〔箴言、コヘレト書、雅歌〕よりも莊重なものは何でしょうか、ヨブ記よりも完全なものは何でしょうか。これらすべては、ヨセフスやオリゲネスが書いているように、もともとの著者たちのもとでは六歩格や五歩格の詩文で書かれ、〔詩として〕流れているのです。私たちがこれらをギリシア語で読むと、いわば別様に響きますが、ラテン語で読むと、完全にまとまりがなくなってしまう。もしある者に言葉の美しさが翻訳によって変えられるということが理解されないなら、その者にホメロスを言葉通りにラテン語に翻訳させてみましょう。さらに言うなら、同じ著者を自分自身の言葉で散文に翻訳させてみましょう。するとその者は語順がおかしくなることや、最も雄弁な詩人でさえほとんど何も語れなくなってしまうことが分かるでしょう。

以上のこと〔言い訳〕はいったい何のためのもののでしょうか。もちろん、それはあなたがたに驚かれないようにするためです、もし私がどこ

かで誤りを犯しても、もし澁んだ文体が子音によって耳障りになったり、母音によって間が抜けてしまったり、主題そのものの短さによって縮められてしまったとしてもです。なぜなら、最も教養ある人々も同じ仕事に汗水たらして働いた〔のに同じ間違いを犯した〕からです。さらに、私たちが翻訳全般について弁護したような一般的な困難に加えて、次のような特殊な問題が私たちには課せられます。すなわち、〔エウセビオス『年代記』の〕記述は複雑であり、異国の名前、ラテン語読者に馴染みのない内容、解決不能な数字、内容と数字を等しく組み合わせた線などがあるので、読んで理解に至るよりも読みの順番を学ぶことの方がほぼ難しくなってしまうのです。それゆえに、あらかじめ警告されるべきだと私は思うのですが、各部分は書かれているとおりに、その色の違いについても保たれるべきです。これは、その仕事が単に非理性的な目の喜びのためだけになされたものだとか誰かが判断してしまわないようにするためであり、また書かれるべきことの退屈を逃れようとして、誤りという迷宮を編んでしまわないようにするためです。というのも、このことは夜を徹して行われたので、近接しすぎてほとんど混同されていた諸王国の境界線は赤色の区分によって分けられ、より後代に書かれた羊皮紙までもが、より以前の羊皮紙がしるしをつけたのと同じ着色箇所を保持することができたのです。

あらゆるものを貶めようとする常習的な欲求から、この巻物に牙を突き立てる者たちがたくさんいるであろうことを、私は知らないわけではありません。まったく何も書こうとしない者以外は、こうしたことを避けることはできないのです。彼らは時代について粗探しをし、順序を入れ替え、内容を咎め立て、音節をふるい分け、また非常に多く起こりがちなことですが、写字生たちの不注意を著者たちのせいにしてしまいます。私は、「もしそれが彼らの気に入らないなら、読まなければいい」と、己の権利によって彼らを押し返すこともできますが、むしろ簡潔に、彼らを穏やかなまま去らせたいのです。それは、彼らがギリシア人たちの忠実さをその著者に帰したり、また私が新たなものとして加えたものが〔実際には〕他の非常に優れた者たちから引き出されたものだとか彼らが知ったりするためです。そして実際、私が部分的には翻訳者の務めを果たし、部分的には著者の〔務め〕を果たしたことが知られるべきです。なぜなら、私は非常に忠実にギリシア語を翻訳したこともあれば、抜け

落ちているように私には見える少なからぬ量のものを付け加えたこともあるからです。〔付け加えたのは〕特にローマの歴史に関してで、それをこの書物の著者であるエウセビオスは、教養人として、知らなかったというよりも、むしろギリシア語で書いているので自分たち〔ギリシア人〕にとっての重要度が低いものとして簡単に触れるに留めたのだと、私には見えます。それゆえに、ニノスやアブラハムからトロイアの占領までは、純粹にギリシア語からの翻訳です。トロイアからコンスタンティヌスの第20年までは、非常に多くのことが、ときに付加され、ときに混ぜ合わされていますが、それらを私は、〔ガイウス・スエトニウス・〕トランキルスや他の著名な歴史家たちから、非常に注意深く抜粋しました。一方で、上で述べたコンスタンティヌスの年から、〔フラウィウス・ユリウス・〕ウァレンス帝の執政官の任期の6年目とウァレンティニアヌス帝の2年目までは、すべて私の〔記述〕です。その終わりに満足したので、私は残りの時代、すなわちグラティアヌスやテオドシウスの〔時代〕を、より広い歴史の記述に取っておきました。それは、生きている者たちについて自由に正しく書くことを恐れたからではなく——というのも、神への恐れは人への恐れなど一掃するからです——、あらゆることがはっきりしていないからです、野蛮人どもが私たちの地で今なお荒れ狂っているために。

オリゲネス『エゼキエル書説教』の訳者序文

解説

序文の名宛人は、明示されていないが、エウセビオス『年代記』の訳者序文の名宛人の一人だったウィンケンティウスと考えられる²²。本序文は冒頭の2語“Magnum est”から「マグヌム・エスト書簡」とも呼ばれている²³。ヒエロニムスが本序文を書いたのは、エウセビオス『年

22 翻訳の底本は、GCS 33 (= Origenes Werke 8), ed. Wilhelm A. Bachrens, 1925, 318. 英訳は、Thomas P. Scheck, *Origen: Homilies 1-14 on Ezekiel* (Ancient Christian Writers 62; New York: Newman Press, 2010), 23-24. 仏訳は、SC 352, ed. Marcel Borret, 1989, 30-33.

23 Pierre Nautin, “La lettre *Magnum est* de Jérôme à Vincent et la traduction des homélies d’Origène sur les prophètes,” in *Jérôme entre l’Occident et l’Orient*, ed. Yves-Marie Duval (Paris: Études Augustiniennes, 1988), 27-39.

代記』のとき同様、380-382年頃のコンスタンティノポリス時代とするのが通常だが、より以前の370年代のアンティオキア時代とする見解もある。本序文の目的は、次の3点を説明することである。第一に、なぜ『エゼキエル書説教』の翻訳にこれほど時間がかかったのか。第二に、送った翻訳作品はどういうものか。そして第三に、他の著作の翻訳の提案である。第一の翻訳の遅れの原因は視力の悪化であり、そこから読書への過度の熱望と、貧窮ゆえの写字生の不足という事態が生じた。第二に、翻訳作品の説明については、『エレミヤ書説教』14篇と『エゼキエル書説教』14篇を、「ごちゃごちゃの順序で」、つまり聖書とは異なる順序で訳した。しかもその翻訳スタイルは、修辭的な技巧を抑えた素朴なものだったという。オリゲネスの著作の三部構成について説明した後、ヒエロニムスは、第三の点である他の著作を翻訳する提案について言及しつつ、写字生を雇うための援助を求めている。しかし、これはおそらく表向きの理由で、実際には自分自身の資金を無心していたのかもしれない。

翻訳

あなたが要求していることは、友〔ウィンケンティウス〕よ、確かに大仕事です。つまり、私がオリゲネスをラテン語にし、またこの人——見者（Ⅰサム9:9参照）ディデュモスの見解によれば、使徒〔パウロ〕以後の諸教会の第二の教師（Ⅰテモ2:7参照）——をローマ人の耳にも与えるように、という要求のことです。しかし、あなた自身をご存じのように、私は、過度の読書を我慢できずに引き起こしてしまった目の痛みに苦しめられています。また筆記者の不足にも苦しめられています。というのも、貧困がその援助さえ取り去ってしまったからです。あなたが正當にも求めていることを、私はあなたが求めているほどの情熱をもって果たすことができないのです。それゆえに、少し前にごちゃごちゃの順序で訳したエレミヤ書への14の説教の後、エゼキエル書へのこれらの14〔の説教〕をも、中断を挟みつつ、私は口述しました。特に気を付けたのは、上で述べた人物の特殊な表現や説教の素朴さ——それらのみが教会に役立つのです——を、翻訳もまた維持することでした、修辭の技術のあらゆる華やかさは無視した上で。なぜなら、言葉ではなく内容こそが称賛されることを私たちは欲しているからです。

そして簡単に思い出していただきたいのですが、オリゲネスの聖書全体に関する著作は三部構成になっていると知ってください。第一は彼の抜粋作品であり、それはギリシア語でスコリアと名付けられています。それらの中で、自分にとって不明瞭なことや何らかの困難があると思われることなどに、彼は要約的かつ簡潔に触れたのです。第二の種類は説教であり、本翻訳もまたこの種類に属しています。第三は彼自身がトモイと題したものであり、私たちはこれを注解と呼ぶことができますが、これらの作品の中で彼は自らの才能という帆の全体を、吹き付ける風に与え、大地から大海原の只中へと出ていきました。〔以上の〕言説の全種類を私が翻訳することをあなたが求めているのは知っています。なぜ私がそれをできないのかという理由は先に説明しました。しかし私は次のことは保証します。もしあなたの祈りによってイエスが〔私に〕健康を戻してくださるなら、私は〔オリゲネスの著作の〕すべてではないにせよ——以前そう言ったのは無謀でした——多くを翻訳することにしましょう。私が声を提供し、あなたが秘書を提供するという、私があなたにしばしば定めてきた契約に基づいて。